

1. 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。(14:1-2)
 - a. イエスは弟子たちに、ご自身は彼らのもとを去り今はそこについて来ることができないと告げたすぐ後で、彼らに励ましと慰めの言葉を語られる。イエスはその宣言をされた時(13:36)、それは言葉通りの意味と比喩的な意味との両方があった。弟子たちにはまだイエスが通られる所に行く準備はできていなかった。ペテロはイエスの言葉に憤り反発するが、イエスはペテロがご自身を3度否定することをはっきりと預言される。
 - b. これから人生の最も暗い時期に向かおうとするのはイエスご自身であるのに、イエスが弟子たちを安心させるために時間を取られているのは驚くべきことである。愛とあわれみに満ちたイエスは弟子たちに、信仰を失わず、神とイエスとのみこころ、主権、すばらしさや計画を信じるように告げ、彼らが通る失敗にも完全に備えられるようにされる。
 - c. イエスが彼らのもとを去る目的の一つは彼らの場所を備えるためであった。
2. わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所にあなたがたをもおらせるためです。わたしの行く道はあなたがたも知っています。」(14:3-4)
 - a. これはユダヤ古来の結婚観である。これは夫が婚約中の花嫁に対して述べる言葉で、彼女をおいて結婚後に住む場所を備えに行くというものである。
 - b. 私が今こうして話している間にもイエスが私たちの場所を備えてくださっているということは驚くべき事実である。イエスが望んでおられるのは私たちが現在のこの世の居住人になることではなく、この世は通過するだけで、いずれ私たちは神の王国が支配する新天新地を相続する、ということに常に意識することである。
3. トマスはイエスに言った。「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。」イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。(14:5-6)
 - a. イエスはご自身はその場所への道であることを明確にされる。全能の神が私たちと和解し私たちの父なる神となってくださる道はイエス・キリストを通す他にない。
 - b. イエスは他の道には偽りがあるが、イエスご自身が真理であることを明確にされる。真理はどんな人をも束縛から解き放す。真理とは議論をするため事実を寄せ集めたようなものではない。真理とはイエスという人なのである。
 - c. イエスはいのちである。その生涯がそれを示している。またイエスに従う者も人生の中でいのちを与える行動をし続ける。イエスはその後、「わたしを信じる者は、わたしの行うわざよりも大きなわざを行います。」とおっしゃる。
4. あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずですが。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」ピリポはイエスに言った。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」(14:7-8)
 - a. イエスはこの地上で神が人となられた姿である。イエスは父なる神そのものである。中には旧約の神と新約の神2人の神様がいらっしゃる人もあるが、イエスはすべてをはっきりさせるために来てくださった。旧約と新約、両方を解釈するのに使うべきレンズはイエスである。本当に神を知り得るのはイエスを通して見た時のみである。
 - b. イエスが父なる神を反映し代弁者となったように、私たちもこの地でイエスを代表する者にならなくてはならない。イエスが父とわたしは一体であるとおっしゃったが、私たちもそのようになることがイエスの望まれることである。
 - c. 弟子たちがイエスの生涯を通して父なる神を「見る」ことができたように、教会の使命はこの地上でイエスの代理として純粋でしみのない花嫁となることである。